

飛田 就一 学兄のこと

西 川 富 雄

1

飛田君が退職されると聞いて、もう定年なのかと少々、愕いている。この二、三年、心臓発作を起こして、確かに元気をなくしてはいたが、少なくともそれまでの飛田君というのは、まことに若々しかった。フィジカルにも、メンタルにも、およそ年齢を感じさせぬ若さがあった。愛すべき稚気を失わなかったせいでもあろう。彼には、子供はない。そのせいでもあるまいが、彼自身が子供のような初^{うぶ}さと無邪気さを失うことなく成人したようなところがあった。ニーチェは、「超人」の資質を語る時、高邁な「獅子」の精神よりも、邪気のない「幼児」の精神をなおより高く置いた。飛田学兄とは、三十数年のつきあいになる私であるが、私は、かれのなかに、ニーチェの言う「幼児」の精神の気高さを見る思いでいる。すくなくとも、およそ、はったりとか、ごまかしのできぬその純な人柄については、一目も二目も置いている。

飛田君は、私が文学部哲学専攻に所属して専任講師から助教授になったころの学生であった。いつであったか記憶は定かではないが、たしか助教授になりたての頃であったかと思う。ホワイトヘッドの『科学と近代世界』をおもしろく読んだ私は『観念の冒険 Adventures of Ideas』を外国書購読のテキストに選んだことがある。ホワイトヘッドの近代批判は、今も私は、洞察の深いものと思っているが、当時、シュリング哲学にほとんど埋没していた私には、新鮮で異様な魅力を感じたものであった。とはいえ、『科学と近代世界』はともかくとして、『観念の冒険』や、『過程と実在』がすらすら読める代物ではない。日本語に置き換えることはできても、内容がつかめないのである。むずかしいものをテキストに選んだことを悔やみつつも、途中で棒を折るわけにもいかない。そのときの、もっとも熱心で、もっともよく読みこなせた学生が飛田君であった。彼のほかには、今は、六甲カウンセリング所長として有名になっている井上敏明君もよくやった学生であったように思う。わからない箇所におつかると、井上君は、気さくに、ああじゃないか、こうじゃないかとぶっつけてくるが、飛田君はなかなか慎重であった。ホワイトヘッドの別のテキスト、『思想の様態 Modes of Thought』まで持ち出して検討しようとするものだから、こちらもたじたじしながら一緒に購読を進めたものである。それにしても、今から振り返ると、すこぶる頼りない先生で、有能な学生には迷惑な話であったとは思いますが、ともかく、彼等と一生懸命にコロキウムがもてたことは、私にとっても有難く、楽しい思い出であった。飛田君の粘りと篤実な勉学態度のおかげで、ホワイトヘッドの難解なテキストも棒を折らずに複数の年間、読

み進め得たのであった。そうした苦勞を共にしたおかげで、それから三十年あまり、私がかれとの間に格別の親しさや近さをもつて接することができたように思う。今でも、彼とは隔意なく接することができ、それを私はまことに有難いことと思っている。

2

粘りと篤実な学習態度は、彼の卒業論文において見事に結実した。カントに関する論文をドイツ語で書いたのである。わが哲学専攻において、ドイツ語での卒論を提出したというのは、先にも後にも彼をおいてほかにはない。もちろん学部学生のこととして、ドイツ語は、今から見れば拙いものではあったろう。論文の内容も、必ずしも問題的であったわけではない。しかし、審査に陪席した私は、彼の根性に敬服するばかりであったし、主査であった今は亡き山元一郎教授も、その意欲を高く評価しておられた。後に、大阪外国大学に転出し、学長をつとめられた牧祥三先生（ドイツ語・ドイツ文学）も、大変に感心され、それ以来、彼は、ドイツ語に関しては、牧先生の愛弟子の一人となったほどである。

3

哲学専攻を卒える前に、実は、飛田君は理工学部数学物理学科で数学を勉強したことがある。当時、世界的に学界の一大潮流となりつつあったのに、分析哲学、および、それに有力な武器を提供していた記号論理学、数学的論理学がある。それをマスターするためであった。加えて、すでにそのころ、「実験」や「真空」をキーワードとする「科学の形而上学」から、それを脱して、むしろラッセルや、ヴィトゲンシュタインを、さらにはチョムスキーらを涉獵して「コトバの哲学」（この表題で後に岩波書店より刊行）に没頭しておられた山元先生の影響もあったのであろう。アリストテレス学者・安藤孝行教授の「そんなの、メリットはないよ、君」という冷やかしにも、「いいえ」と意に介さず転学部した飛田君は、日頃の慎重さからすれば意外なほどの決断力を示したものであった。

私は、彼は、必ずしも器用な人ではないと思う。才気煥発型でもない。だが、彼には、秘めたところに「進取の気性」のようなものがあつたように思う。いちはやく、分析哲学や数学的論理学の領域に足を踏み入れていったのがそうであるし、やがてカントを離れはしたが、山元先生の仕事を手伝いながらヴィトゲンシュタインに取り組むようになったのもその現われである。学界に先駆けてヴィトゲンシュタインの「コトバのやりとり論 Sprachspiel」（通常は言語ゲームと訳し慣らわされている）に着目した業績は、学界でもっと評価されてもよいものと思ふ。大変な凝り性であった山元先生の、ヴィトゲンシュタインのユニークな訳業をかたわらでよく手助けた功績も学問的に決して小さくはない。

* やがて、彼の業績は、論文『ヴィトゲンシュタインの“事態” Sachverhalt 概念について

て』（『立命館文学』236号）とか、『ヴィトゲンシュタインの哲学における“前期”から“後期”への転換について』（『立命館文学』261号）とかに結実した。訳業としてはJ. ハートナック『ヴィトゲンシュタインと現代哲学』（法律文化社、1970）などが挙げられる。

4

「進取の気性」といえば、学問的な話からそれはするけれど、彼がいちはやく、自動車時代に先駆けて自動車免許を取得したことも挙げられよう。所得倍増のかけ声は聞かれたものの、まだまだ私たちサラリーマンの貧しかった時代のことである。私なんか、ようやくテレビを買って「三種の神器」を月賦でそろえたころである。彼はすでにノークラッチの自家用車を愛用していた。そう器用な人ではないし、運動神経もそう発達しているとも思われないうし、「自転車ならともかく、自動車とは、ね」と、彼に家まで送ってもらいながら、よく冷やかしたものである。「自転車は倒れるけれど、四輪車はその心配はない。」なるほどそう言われてみるとそうであると妙な感心を助手席でしたものである。実直なかれは、私を、交通量の多い（その頃は、今からすると想像できないほど空いてはいたが）国道1号線を遠いわが家まで、なんべん送ってくれたか、数え切れないほどである。

5

わが立命館大学文学部哲学専攻には、専攻を中心とした「立命館哲学会」と称する学会組織がある。大学紛争以前に、当時の大島助手（現沖縄国際大学名誉教授）を中心に学会活動を行ったことはあるが、紛争をきっかけに長いこと開店休業の状態にあった。

それを嘆いて、先年、学会再興の中心になってくれたのが飛田学兄であった。それ以来、毎年一回の学会誌『立命館哲学』を刊行し、若手研究者に発表の機会を与えているのは、実に学兄のおかげである。残念ながら、彼の病気のために、学会活動が一時休眠するかに見えたが、幸い哲学専攻を中心に、活性化に尽力していただいていることは、有難いことである。派手でなくてもよい。着実な活動を続けていきたいものと私は思う。この機会に、退職後も、学会の成長と発展に学兄の助力と援助を乞うておきたい。

「立命館哲学会」への寄与だけではない。後輩への面倒見のよい彼は、かれらにさまざまな機会を用意したことがある。彼等はその機会を与えられて、若手研究者なりの力備を培っていったはずである（たとえばかなりの数の共訳の刊行など）。

6

ドイツ・イデアリスムスの、ヘーゲルはいうまでもなく、フィヒテにしても、シェリングにし

でも、学は、初めが終りでもあるというかたちで、円環を閉じると説いた。学が体系をなすとはそのことを謂う。学だけではない、人生の学業も案外にそうであるかもしれない。私事を語るようになって恐縮だが、私は、むかし哲学青年づいていたころ、西田幾多郎や木村素衛のものを好んで読み耽ったことがある。西田哲学は難しかったが、木村素衛の『形成的自覚』や『表現愛』は、たいへんに面白く読めた。フィヒテ学者・木村は、フィヒテの純粹意識の自己定立の営み、すなわち「事行」を、さらに、西田のポイエシス（制作）の形而上学の影響のもとに深めようとしたものであった。私は、当時、未熟なままに、世界はその真実相においては、それ自身がポイエシスとして自己形成的、自己創成的であると考えたことがある。そして、近ごろは、主要な関心を、若い頃のシュリングやゲーテに心魅かれて、自然を哲学することに向けている。自然、ないしは宇宙世界を、それ自身においてポイエシス的世界として構想しうるのではないか。そういう思いから「自然の形而上学」の成立可能性を探りたいと思ってもある。若いころの思念が、今ふたたび回帰してきて、初めは終りを予想し、終りは初めへの還帰として円環を閉じるものかという思いを、あらためて強めてもある。

飛田学兄は、この二、三年来、体をこわしているが、どうかかつての粘りと健康を回復して、年来のヴィトゲンシュタイン研究を仕上げていただきたいものと思う。ここにこの稿を終わるに当たって、私の一希望を述べさせてもらうことにしたい。

君は、カント研究から哲学を始められた。そして、今は、ヴィトゲンシュタインである。カントは、少なくとも『純粹理性批判』に即するという限りは、「経験の形而上学」の可能根拠を問うたし、同時に、「現象の総体」とも規定された自然のその形而上学の可能性を問いもした。ヴィトゲンシュタインはどうであろう。たしかに、かれは、「語りえぬ unsagbar」領域、形而上の領域について語ることの徒勞を説いた。そうでありながら、晩年は、たとえば『哲学的諸探求』に見る限り、必ずしも、味気ない論理の実証主義の殻に閉じこもらない気配もみえる。形而上学成立の不可能性を見て取ることによって、どこかに形而上学の成立可能性を窺望するところはなかったかどうか。もしあるとすれば、それは、ほぼ170年を隔てて、カントの試みと重なり合う面もあろう。ヴィトゲンシュタインにおける「哲学の、とくに形而上学のディストラクション」は、カントにおける、「特殊形而上学」の学問的拒否と符合するとも言えよう。それは、同時に「一般形而上学」の可能性を問う学としての哲学の機能、ないしは哲学のアクチュアリティを顕わにすることにもなりはしないだろうか。いささか私自身の個人的関心に走りすぎたが、そういった問いを、私は、学兄がこんどの退職をしおに解明していただきたいものと思う。そのことによって、学兄の学的労作はひとつの円環を閉じることになるであろうと思うからである。口はばったい注文と聞こえたら寛恕を乞う次第であるが、門外漢の一希望を申し述べてペンを擱きたいと思う。

(1994. 9. 20)